

## 社会科

世界史の授業で悩ましいテーマの1つが文化史。作品に触れて何かを感じてほしい、教養として知ってほしい、受験上の知識としても知っていてほしい…など。どの点に重点を置くのか、生徒にはどのような活動を求めるべきなのか。そこで、2年次の世界史探究の授業から進めてきたことの1つが、その時代を代表する芸術作品について自分の感想や考えを表現すること。2年次のヘレニズム文化ではミロのヴィーナス、サモトラケのニケ、ラオコーンから注目した作品を選び、調べ、表現する場を設けた。

3年次の世界史ゼミではルネサンスの代表する人物をテーマに、3～4人のグループで作品・思想・後世への影響などについて調べ、スライドを作成し、発表をする授業を実施した。生成AIの力を借りたモデル・スライドを作成してあらかじめ提示。モデルを模倣して終わるのではないかとの危惧もあったが、生徒はモデルを参考にしながらも自分たちなりに工夫を重ね、個性的なプレゼンテーションを行うことができた。

今の生徒はデジタルネイティブ。デジタル機器を駆使して作業は進む。スライドづくりも手慣れた様子。しかし、プレゼンテーションになると、堂々としてできる者もあれば、恥ずかしがり屋も散見。これは今後の課題。プレゼンテーションを



見る生徒も、興味

津々。講義形式の授業ではわからない、伝えきれないことを自ら調べ、発表する。自分で調べたことの定着率が高いことをその後の定期試験で確認。

今回のこの授業は、夏休み前後の時期を活用したが、問題点として次の3点をあげられる。①充実したものにしようとするほど時間が必要。②クラスの雰囲気。③生徒の誤りについての指摘。

①についてはどこかで妥協が必要。最初に締め切りを明確にして、作業を進めた。②については、日頃の授業の雰囲気作りが重要であることを痛感。③について、昨今の主体的な授業を求める動きの中でよく言われるようだ。生徒は思い思いの意見を述べるが、それについて十分な吟味もなく、「多様な意見を聞くことができましたね」とまとめられて終わってしまう。今回も、プレゼンテーションやスライドの中に、認識の誤りなどが見られた。事前の指導では指摘できず、そのままプレゼンテーションへ。教員からの質問などで、疑問などを提示したものの、十分ではない。生徒の意欲や成果物は高く評価したい。しかし誤りは正したい。改善すべき課題と考えている。

生徒はこちらの予測を超えて、個性的なプレゼンテーションを展開し、それなりに作品や人物に愛着を持って授業を終えることができた。今回はこれでよしとしたい。今後、改善を重ねよりよい方法を模索したい。

※ 図版は生徒作成のスライドから(上からブリューゲル、ダンテ、ダヴィンチ)

